慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 明治日本とギリシャ思想 : 新聞雑誌からみる西洋古典普及史 |
| Sub Title | |
| Author | 木村, 尚美(Kimura, Naomi) |
| Publisher | 慶應義塾大学湘南藤沢学会 |
| Publication year | 2012 |
| Jtitle | 日本政治外交研究 No.6 (2012. ) ,p.46- 73 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 慶應義塾大学日本政治外交研究会 |
| Genre | Technical Report |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001005-00000006-0046 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 明治日本とギリシャ思想

## ―新聞雑誌からみる西洋古典普及史―

総合政策学部四年　木村尚美

序章
一、古典軽視の西洋化
二、ギリシャ思想研究の始動と社会的関心
三、大衆社会への普及の試みと失敗
終章

## 序章

現代日本において、古典ギリシャ思想は社会一般にあまり浸透していない。研究者の間では、明治中期から現在に至るまで大学を中心に古典ギリシャ思想の研究が進められてきた。しかしそれは一般社会にまで共有されているとは言い難く、研究者と社会一般の間のギリシャ思想に対する理解は、近代西洋思想のそれに比べて大きな隔たりが感じられる。

日本の歴史を外国文化からの影響の観点で区分すると、大化改新の律令制導入に始まる日本の「中国化」、その中国化された古代日本を封建制に作り変えた鎌倉・足利・徳川幕府による日本の「日本化」、そして、明治維新の文明開化に始まる日本の「西洋化」のように三段階に分けて通観することができる[1]。その歴史の中で、中国の古典である儒教思想は、長い時代を経て既に我々の思考様式の一部となり、日本文化の中に浸透しているのに対して、明治維新から約一五〇年程しか経過はしていないとはいえ、ギリシャ思想は私たちの思考や文化、または精神史上の一部としては存在していないようである。

現代日本社会が、自由、平等、博愛の理念に象徴されるような近代の西洋思想の影響を強く受けているのは言うまでもないが、その淵源に位置する西洋古典であるギリシャ思想について議論されることは多くない。そもそも、近代西洋思想と古代ギリシャ思想の関係性についてはヨーロッパの学者の間でも意見が分かれている。一方は、神学中心の中世から人間理性への回帰として啓蒙主義が生まれることから、ギリシャ古典―近代の連続性を強調し、またもう一方は、古代、中世からの脱却として近代思想を捉えそれらの断絶を主張する立場など、その見解は様々である。

日本国内では、京都学派の内山勝利が、前者の立場に立ち、「相互批判」や「根源的思考」は古代ギリシャ思想に由来するものであり、西洋の根幹をなすものとしての西洋古典も西欧化の道を辿

った日本にとってわれわれに直結した古典としての位置を占めつつあると論じている[一]。本稿も内山と同様の観点から、なぜ、西洋の根幹であるギリシャ思想について広く知られることがなかったのかについて研究することにする。明治時代の日本は、「西洋化」の根幹をなす古代ギリシャの精神性をどのように吸収し、咀嚼または拒絶してきたのかという観点から日本近代史を導き出していきたい。

本研究は、明治時代に学者たちによって研究され始めたギリシャ思想が、どのように社会に発信されたか、そしてそれをどのように社会は受け取ったかという点に焦点を当て考察していく。論文の構成は、明治時代を時間軸に沿って初期、中期、後期の三つに区分し、それぞれ第一章、第二章、第三章とした。

第一章の明治初期では、「西洋化」が開始され、西洋思想受容が進められるなかで代表的な知識人たちのギリシャ思想に対する認識を確認する。続いて第二章では、東京帝国大学改編の明治十九（一八八六）年からを明治中期として、思想的転換が行われる風潮のなか、近代日本の第二世代目の学者たちによって着手され始められたギリシャ思想研究とそれに対する社会の反応を見ていきたい。そして、第一章、第二章を足掛かりとして、第三章では、大衆化した社会に向けてギリシャ思想の普及がいかに行われたかを考察する。『プラトーン全集』が初めて日本語訳で出版される明治三六（一九〇三）年以降を明治後期と捉え、社会一般のリテラシーが高まり幅広い読者を獲得していた大衆紙を通して社会への浸透を見ていきたい。以上の構成で、ギリシャ思想研究の進展と共に、明治時代のメディア史、社会一般のリテラシーを射程に入れながらギリシャ思想普及史を考察してゆく。

## 一、古典軽視の西洋化

日本で初めて公的に西洋思想研究が始められたのは、安政三（一八五六）年に設立された江戸幕府直轄の蕃書調所である。黒船来航以後、西洋語の研究機関として発足し、森有礼、西周、津田真道、加藤弘之、箕作麟祥、西村茂樹など、各藩の洋学者たちが集められた。幕末に然るべき才能を発揮していた彼らは、明治に入って日本初の学術結社である明六社を結成し、『明六雑誌』や演説会を通して積極的な啓蒙活動を行っていた。

本章では、ギリシャ思想研究の先触れとしてこれらの明治初頭の啓蒙思想家たちが、西洋思想のどこに重点を置いていたのか、東洋古典に精通する彼らの西洋古典に対する見方について考察し、それらが後世に与えた影響についてみていきたい。

## （1）啓蒙思想家と実証主義的進歩史観

明治維新の啓蒙思想家のなかでも最も影響力の大きかった人物として福澤諭吉が挙げられる。福澤は、主に蕃書調所で教授を務めていた洋学者たちによって結成された明六社において、はじめに社長候補となった人物であった。福澤自身が固辞したために、社長の座は発起人である森有礼が務めることとなったが、その後も官設アカデミーである東京学士会院の設立時にも福澤は最初の会員に指名される[三]ことからも、明治初期の洋学者たちの間でも信頼の厚い人物とされていたことが推察できる。

日本の近代化に重要な役割を果たした福澤であったが、日本の「近代」は後世の日本史家たちが明治維新から始まったと規定したもので、福澤を含め当時の知識人たちにとって近代性という理念を実現することを目標に掲げた近代化革命ではなかった[四]。富永健一によると、明治維新以来、日本の知識人が「西洋化」として考えてきたものを構成している諸要素は、近代国民国家の形成、市民革命、科学革命、啓蒙主義、産業革命といった五つの「近代性」の要素に還元することができると指摘し[五]、明治初期の思想家たちにとって「近代性とは、西洋化として日本に入ってきた文化伝播のことであり、それが『文明』の名で呼ばれたものであった」[六]と論じている。

この近代性を象徴する理論の一つに実証主義がある。それは、知識の源泉を事実に基く科学的観察のみに求め、それ以外のいかなる源泉によるものをも知識として認めない[七]とする立場である。実証主義は、科学主義の方法的視点の優位性を唱え、相対的に神学的、形而上学的知識の没落を導くものであった。

実証主義を社会学に適用したフランスのオーギュスト・コントは、「人間の知識の状態（「精神的」側面）が「神学的」「形而上学的」「実証的」という三状態を経過し進化していく[八]」としたように、福澤は、「文明論とは人の精神発達の議論なり」そして、「文明とは結局、人の智徳の進歩と云って可なり[九]」と述べて、人類の知識の進歩史観を採用した。科学的思考方法に基づいた実証的知識に到達するまでの前段階を、一九世紀ヨーロッパではこれらを「退歩的精神[一〇]」と呼び、福澤は「古習の惑溺[一一]」と呼んだ。

実証主義の立場から古典的な学問の脱却を試みたのは福澤だけではない。明六社の会員の一人で、「フィロソフィー」という原語から「哲学」という訳語を創ったことで知られる西周もその一人である。西が受容した「哲学」は一九世紀ヨーロッパの潮流である実証主義的経験論を指しており、それは「従来の漢学に含まれた形而上学的理想主義的な程朱の宋学に対抗する古学に属する徂徠学の精神が新規の形式を以て表出されたもの[一二]」であった。同

様に、西と共にオランダへ留学した津田真道も、仏教や儒教など従来の学問を「高遠ノ空理を論スル」ものであり、それらが「虚学[一三]」であると否定している。

このような古典軽視の姿勢は近代西洋思想との衝突によって日本に初めて生れたものではなく、それは江戸後期に既に萌芽となって現れ初めていた。徳川時代の統治は、儒学の教義上の理想とはかけ離れているにも関わらず、理想社会として描かれた周代と同じ封建制を採用していたことから、当時の徳川幕府の現行制度は歪められながら儒教的に合理化されていた[一四]。したがって、明治の啓蒙思想家たちは儒教の価値体系そのものをあらかじめ克服しなければならなかったことと、十九世紀ヨーロッパの大勢であった実証主義の思想が共鳴し、洋学を学んだ啓蒙思想家たちによって日本に実証主義的な知識の進歩史観が積極的に取り込まれた。

伝統的な儒学の権威の排斥を導くための論理として実証主義的な知識の進歩史観が採用されたことは、同時に非実証的であり進歩史観上「退歩的」であると見做される西洋古典のギリシャ思想については無視される必要があった。明治初期の啓蒙思想家たちの、理想主義的な学問体系を蔑視する態度はすでに幕末の頃から形成されており、「西洋化」が始められた明治維新において実証主義的な知識の進歩史観を採用したことで、その価値観が一挙に解き放たれたのであった。

彼らは実質的には近代性を標榜しながらも、それは「西洋化」であると考えられていたために、西洋思想に傾倒しながらも西洋の古典に目が向けられなかった。こうして、明治初期の日本は、「西洋化」や「欧化」という旗印を掲げながら、非実証的な儒教思想の排斥と同時に非実証的なギリシャ思想を疎外しながら西洋思想受容を行っていった。

### (2) 実学に傾倒した教育制度の確立

第一節でみてきたように、明治初期の啓蒙知識人たちは実証主義の立場から古典的な学問に対する蔑視の姿勢を共有していた。本節では、その彼らによって築き上げられていく、近代教育制度についてみていきたい。明治初期に確立する近代教育制度は、ギリシャ思想の普及にあたって重要なアクターとなる明治中期から後期にかけての研究者やメディアの編集者たちの思想形成、そしてそれを受容する社会側のリテラシーにおいて重大な影響を与えているためである。

明治初期の社会状況は、江戸時代からの士農工商の階級身分制が改められた際に行われた身分別の戸籍登録から概観することができる。明治四(一八七二)年の各身分の人口比率を見ると、華

族が〇・〇〇八一％、士族が五・五％、平民が九三・四％である[一五]。福澤を含め、西洋化という名の近代化を目指すた洋学者たちにとって近代的教育制度を確立し、人口の大半を占める平民のリテラシーを高め、啓蒙してゆくことは最重要課題の一つであった。

日本初の総合的な教育法令である学制が頒布されたのは、明治五（一八七二）年であり、この草案には明六社の社員であった箕作麟祥らが携わっていた。学制は、江戸時代の教育が藩学校や庶民のための寺子屋教育など各地域で下からの自然発生的な形で行われていたものを解体し、国家の手によって上から強硬的に組織化されたという点において日本社会に大きなインパクトを与えた。また、小学校では福澤諭吉の『啓蒙手習之文』や『西洋事情』等がそのまま教科書として用いられていた[一六]ことからも、明治初期の啓蒙思想家たちが、明治の日本人の思考を広範に規定してゆくほど直接的な影響力を持っていたことがわかる。

学制の頒布に伴って公布された「学事奨励に関する被仰出書」には、福澤諭吉の『学問のすすめ』の影響が強く滲み出ていると柿沼肇は『近代日本の教育史』のなかで言及している[一七]。学制序文による理念には、「空理虚談の途に陥」るような封建的教字ではなく、「日用常行言語書算」をはじめとする実学であるべきことが示されていた[一八]。つまり、新政府は福澤ら啓蒙思想家たちが虚学とみなした古典的な学問を退けながら近代教育制度の確立を図っていた。

伝統的な儒学の立場を退廃させる学制に対しては、政府内部からも、「知育偏重」と批判され、西村茂樹らによって儒教主義的徳育政策を行うべきだという主張もされていた[一九]。しかし、伊藤博文や福澤諭吉らがこのような古典重視の提言に対してもまた批判を展開し、儒教主義的徳育政策は行き詰まりをみせた。

その後、明六社結成の発起人である森有礼が初代文部大臣となって明治十九（一八八六）年、新たに小学校令、中学校令、帝国大学令を制定した。イギリス、アメリカ留学を経験した森有礼は「普通心（コモンセンス）」を基礎に置いた徳育政策を念頭に国家主義的教育再編行いつつ、儒教主義的徳育政策の克服に力を注いだ[二〇]。こうして、森によって構築された学校体系が、その後幾度かの改編を経つつも大もとでの変更なしに保持され続けていった[二一]。

やがて、儒教主義的徳育論争が再燃し、明治三三（一九〇〇）年の小学校令をもって知識重視の教育から徳育へと移行は実現されるが、明治五（一八七二）年から明治三三（一九〇〇）年までの間は、義務教育において古典軽視の実学傾倒の教育制度が維持されていた。

明治日本のギリシャ思想の普及史を扱う上で最も重要となるの

は、本稿で取り上げる明治一九（一八八六）年から明治後半に活躍する研究者や新聞雑誌の編集者たちは皆、新政府の政策により創立された教育制度の影響を受けているという点である。福澤ら明治初期の啓蒙思想家らの影響を強く受けた教育制度下で学んでいたという点を本節では強調しておきたい。

### （3）知識としてのギリシャ史―『明六雑誌』

これまで、明治初期の代表的啓蒙思想家たちの古典軽視の姿勢と、それらが明治日本の社会に与えた影響について考察してきた。本節では、彼らが出版していた『明六雑誌』を見てゆくことにする。新奇の西洋思想を社会へと発信する媒体としての役割を果たしていた同雑誌において、彼らがギリシャ思想がどのように伝えていたのかを確認する。

明六社は先に挙げた森有礼によって、洋学者たちを集めて明治六（一八七三）年に結成された。明六社の活動は、雑誌発行のみならず、新聞広告で聴聞希望者を募る演説会を隔週で開くなど、積極的な西洋新知識による啓蒙活動を行っていた。その影響は、近刊の『植木枝盛日記』によって都下の青年や知識層に大きな波紋を巻き起こしていたことが推知されている[二二]。また、明治初頭は日本における雑誌の誕生の時代であり、『明六雑誌』が発行されるまで、国費支弁の『文部省雑誌』などを除けば、雑誌と呼ばれるもののほとんどは宗教、医学関係のものに限られていた[二三]。この背景から、直接時事批判を行う現在の総合雑誌の要素を持った初めての雑誌でもあった。

『明六雑誌』全一五七稿のうち、ギリシャに関する語が一字で含まれるものは、内十稿であり、最も詳細にギリシャ思想、またはギリシャ史について記述しているのは、箕作麟祥である。

箕作「人民の自由と土地の気候と互に相関するの論」
（モンテスキュー『法の精神』からの抄訳）

昔時「希臘（ギリシャ）」の碩儒「アリストートル」が云く、およそ「亜細亜」人は、機知ありて技芸に巧なりといえども士気なきがゆえにつねに聴順して、あえて自由なるを欲せずと[二四]。

この文は、『明六雑誌』全論稿の中で唯一みられるギリシャの思想家自身の言葉の引用文である。本文がモンテスキュー著『法の精神』の抄訳であることからもわかるように、西洋古典に関しては、明治維新の啓蒙思想家が熱心に取り入れようとした近代西洋思想の中から断片的に知識として吸収されていた。

箕作麟祥「リボルチーの説（二）」

アテンス国（アテネ）はこれ（スパルタ）に異なり、初めて真に確認をして自由の権を得せしめしゆえに、かのペリクルスが波斯（ペルシャ）と戦い国のため死を致せしアセンス人を弔する文についきこれを観るときは、すなわちその人民みな、その国政に参預するの権を有し、もってその代理者を選挙し、またその家事を治め、器具・衣服・飲食を備うる、みな己れの意に任せ、治平無事のときはもっぱらその意を修文・啓智に注ぎ、かならずしも練兵・体操をもってその主務となすを要せず。互に好むところの書を読み、互に思うところの説を唱え、あえて自由ならざるなきを見るべく、ゆえにアテンスの人民はひとり勇敢にして気胆あり、よく危険を冒し、自ら顧みざるのみにあらず、その文事に嫻い、学芸を講ずる、当時世上にその比なし[二五]。

右の引用文が、『明六雑誌』においてギリシャ史について最も詳細に記述されている論稿である。ギリシャに関する残りの八稿はほとんど、人名や地名を言及しただけのもので、それに関して深い考察は行われていない。これからわかることは、明六社の啓蒙知識人たちは、西洋近代思想を学び取る過程で、ギリシャ古典が西洋の古典として位置づけられていることは知識として断片的に知っていた。しかし、それらがしかし受容する西洋思想の歴史の中から選択したのではなく、近代の実証主義的な思想のみを取り入れ、儒教排斥の必要性から非実証主義的な古典の学問に対しては、東西を問わず消極的であった。

また、現実主義的傾向を共有している明六社の中で箕作麟祥以外にも、古典ギリシャに関する論稿を掲載している中村正直や、「明六社」の会員の中で儒教主義的徳育論を展開した西村茂樹は理想主義的な傾向をもっていた。桑木厳翼は彼らについて、「この社に属しながら多少也と異なっていわゆる理想主義的色彩を有した中村正直、西村茂樹等諸氏はそれ自身に於いては各傑出した人と称し得るが、この時代の思想大勢にはやや一致しない所もあったのではないかと思われる」との見解を示している。

この桑木の見解は、それは当時の思想的趨勢が現実主義的であったことを示している。現実主義であった明治初期の啓蒙思想家たちにとって現実の問題を解決しうる実学が最重要であり、現実社会に直結しない東西の古典の価値は低く評価されていたのが、明治初期の大勢を占めていたのであった。

### （4）新聞投書からみるギリシャ史への関心―『朝野新聞』

第一章一節から三節において、古典軽視の西洋思想受容が明治

初期の啓蒙知識人らに共有されており、その姿勢は近代教育制度にも影響を与えたということについて考察した。知識としてギリシャ史ないしギリシャ思想を認識してはいたが、儒教的理想主義の排斥と同時に、現実的な問題を解決しえない西洋古典については消極的であった。それは明治初期の思想界をリードしていた学者の中で共通していた姿勢であったため、その古典軽視の姿勢は上からの教育制度と同時に一般化する準備が整えられた。

しかし、儒教排斥の教育制度が成立の過程でもその反発として儒教的徳育論争が行われたことからも明らかなように、社会全体が古典軽視に賛同していたわけではない。明六社の中でも西村、中村が理想主義的であったように、江戸時代に精神的基盤を持つ教養のある人々の中には、伝統的な古典に対する価値を強く認識していた者もいただろうと考えられる。そのような観点から、本節では、当時の思想的大勢とは異なる見解を持った人々について『朝野新聞』からみていくことにする。

リテラシーに大きな格差が存在する明治初期の新聞界は、「中等以上ノ人民」を対象とした「大新聞」と下等社会に向けて書かれた「小新聞」に区別され明確な棲み分けがなされており[二六]、「大新聞」の主な購読者は官庁、官吏、他に豪農や豪商も読者であり、一方の「小新聞」は「大新聞」よりも読者層が広かったと考えられる。本節で扱う『朝野新聞』は、「大新聞」の中でも例外的に「小新聞」の読者層と一部重複していた新聞である[二七]。

渡辺雅弘の『日本西洋古典文献史』によると、『朝野新聞』における古典ギリシャの論稿は、明六社の活動が停止した明治八（一八七五）年からみられる。

明治九（一八七六）年九月二七日・投書　西黒門町　中山松満

政府ト云ヒ社會ト云フモ亦其ノ識見ニ偏スルヨリ或ハ當時ノ人情に乖戻スルノ議論ヲ發スル者有レバ其ノ是非ヲ問ハズ徒ニ奇異ノ看ヲナシ此レヲ捕ヘテ囹圄ニ幽シ悲風酸露ニ呻吟セシメ甚シキハ磔梟ノ鬼ト爲ルニ至ル是レ偸安ヲ僥倖セントスル者ノ所爲ニシテ歴史上ニ粲然タルナリ此レヲ西史ニ徴セバ古來最モ著シキ一項ヲ得ル即チソクラテスノ冕刑是レナリ（以下、ソクラテスの死）

明治十一年（一八七八）六月三十日・投書

吾輩當テ希臘（ギリシャ）史ヲ引証シテ競争ノ利源ハ一欒シテ軋轢ノ毒窟ニ陥ル、有ルヲ論辨セシガ今又國家盛衰ノ因ヲ分カル、所以ノ理ヲ希臘ニ徴證シテ聊カ黄喙ヲ鼓セントス（以下、アテネとスパルタの比較）

新聞の投書から、明六社の人々が積極的に取り入れようとしていなかったギリシャ思想について関心を向けている学識のある者もいなかったわけではないということがわかる。これらの投書の著者がどのような人物であるかは明らかではないが、当時の社会全体のリテラシーからその身分を推測することも不可能ではない。

明治初期の識字率に関するデータは存在しないが、研究ではしばしば自己の姓名を書くことができるかを調査した自署率が代用される。八鍬友広の「明治期日本における識字と学校」によると、残存している自署率のデータから、自署率の高さと身分の間に強い相関性があることが示されている[二八]。この相関性から推測するならば、右記の投書でギリシャ思想について書く論述力を持った人物は、おおよそ上位の身分の者であった可能性が高いと推測することができるだろう。

つまり、政府の政策に積極的に関わり、公的にも重要な地位を占めていた思想的リーダーたちが古典軽視の実証主義的な傾向を持っていた[二九]ものの、一方でその潮流とは趣向を異にしながらも、学識のある者のなかで西洋古典であるギリシャ思想について関心を持つものも少なからずいたということを述べておきたい。

## 二、ギリシャ思想研究の始動と社会的関心

明治中期は、西洋思想を日本に導入した啓蒙思想家たち自身と、またそれを受けた社会の両者にとって、自らに根差した儒教を中核とする伝統的価値観と新しい西洋思想の心情と論理との乖離に気付き、反動化が起きた時代であった[三〇]。また、東西思想を同一次元において包括しようとする試みも始まっていた[三一]。そのような思想的転換が行われ始める潮流の中で、日本はギリシャ思想研究の草創期を迎える。

明治初期の啓蒙思想家たちの影響を受けて整備された近代教育制度は少しずつ社会に定着し始め、就学率は明治二四（一八九一）年に五〇％を超えた。明治中期は商業誌時代の黎明期でもあり、新聞や雑誌の読者層は就学率の向上と共に拡大し、流入する西洋思想の研究者たちからの情報を幅広い階層の人々が目にすることができるようになっていたといえる。

明治一六（一八八三）年四月の新聞紙条例の改正は学術雑誌と評論雑誌との区別を明確にし多額の保証金を規定した上に、明治一七、八年を頂点とするデフレの進行等によってそれまでの多くの雑誌は廃刊に追い込まれ、明治中期に入って日本の雑誌界は一挙に刷新された。それには、近代教育制度の普及と進歩が読者層を変革しつつあった[三二]ことも要因としてあったことは疑いない。

第二章では、ギリシャ思想研究の第一人者である哲学者大西祝（はじめ）

が、どのように発信していたのか、そして明治中期を飾る商業雑誌の中での取り扱われ方について考察していきたい。

### (1) 東京帝国大学

明治一九(一八八六)年、明六社の発起人である森有礼が文部大臣となり、勅令の形式を以て「帝国大学令」を公布した。それによって、森と対立していた東京大学総理加藤弘之を更迭するという強権を発動させ、大学の質的転換が行われた[三三]。近代学問の最高峰である東京大学は東京帝国大学に改称され、幕末以来怒涛のように侵入した英米系の西洋思想から、漢学、国学がふたたび見直されると同時に、サンマー、サイル、モース、およびフェロノサといった一群の外人教師たちによってドイツ観念論に代表される理想主義哲学が日本に植えられ始める[三四]。

ギリシャ思想研究は、この東京大学から東京帝国大学への転換期に日本で開始された。その新学風の中、熱心にギリシャ思想研究を始めその第一人者となったのは、大西祝(はじめ)である。

大西は、「西洋化」に突入した明治時代の第二世代目の思想家である。彼は帝国大学教師ルートヴィヒ・ブッセから影響を受け、理性のみを判断基準とした批判主義を貫き、ドイツ哲学、特にカントの研究者として知られている。ドイツ学派を学び、ドイツ語の「アウフクレールング」、英語の「エンライトゥンメント」に対し、「啓蒙」という訳語を充てた人物であると考えられている[三五]ことからも、日本の理想主義哲学の草分け的存在である。

大西については、平山洋の『大西祝とその時代』で包括的に論じられている。以下は、同研究を参考に大西の学問上、思想上の背景を踏まえながらギリシャ思想研究の端緒について考察する。

元治元(一八六四)年、大西は岡山藩士の子として岡山城下に生まれ、近代教育制度下の地元の小学校を卒業した。大西の親戚らが次々にキリスト教に入信したことから、幼少の頃からプロテスタンティズムの影響を強く受けて育った。明治十(一八七七)年、大西が十四歳のときには、京都の同志社英学校に入った。この同志社は、元治六(一八六四)年に禁制を犯して函館から脱出しアメリカへ向かった新島襄によって創設された学校で、大西は創立の二年後に入学した初期の学生のうちの一人であった。小学校時代に実証主義的影響を受けた近代教育制度の中で教育を受けているものの、後にキリスト教系の学校へ進学したという学問上のバックグラウンドは、青年期の大西の中に明治初期の啓蒙思想家たちとは異なる思想的基盤が形成していったと考えられる。

七年の同志社生活を終えて、明治十七年(一八八四)大西は上京し東京大学予備門に編入、東京大学文学部に入学した。その文

学部に大西が入学して半年後に東京帝国大学文科大学となる。彼はそのまま大学院に進み、給費研究生となった。卒業した後は、早稲田大学の前身である東京専門学校で教鞭を執り哲学、倫理学、論理学、英語講読を教えていた。明治三一（一八九八）年には、ドイツに留学したが、翌年ライプツィヒ滞在中に精神失調を患い、帰国して明治三五（一九〇〇）年に三十七歳の若さで他界した[三六]。

東京大学文学部に在籍中に、大西は創刊開始からまもない『哲学會雑誌』で詳細なギリシャ思想研究の成果を連載する。『哲学會雑誌』は、明治二十（一八八七）年に創刊され、帝国大学での研究成果としての哲学の諸論文が発表されていた雑誌である。

大西は『哲学會雑誌』の第五号から第三十三号まで「西洋哲学史」と題する連載で、「ただ學説を記述するにとどまらず其の學説の出で来し所以又その変遷し来たりし所以を説明せざるべからず[三七]」と述べ、ギリシャの数々の学派の思想について詳細にまとめた。同連載にあたって特筆すべき点は、大西は明治初期までに断片的に伝えられてきたギリシャ思想を、各学説が生れる背景とその変遷をも含めて詳細にまとめ体系的にそれらを整理して紹介したという点である。

さらに大学院へ進み、給費研究生の立場で研究を続けている大西は、明治二二（一八八九）年の東京専門学校（現早稲田大学）で「古代希臘（ギリシャ）の道徳と其基督の道徳」と題した講演を行った。そこで、大西のキリスト教思想を通したギリシャ思想への関心が示されている。

「古代希臘（ギリシャ）の道徳と基督教の道徳」

近世の欧羅巴の道徳上の思想は之を形造る要素から云へば基督教の思想ばかりではなく、又希臘の思想ばかりでもなく両者の混合である。欧州の思想には此二箇の要素があることを知り、又明に其要素の何たるを知らなければ迚も現今の思想を解することは出来ぬ[三八]。

この講演では、西洋思想はキリスト教とギリシャ思想の両方の混合であるために、西洋思想の理解には両方の要素を知らなければならないと学生に伝えている。新学風へと入れ替わったばかりの帝国大学文科を卒業した大西の喚起は、西洋思想の問い直しが図られていた風潮の明治中期の学生たちに少なからず影響を与えただろう。

明治二三（一八九〇）年七月五日から十五日まで、大西はキリスト教青年会主催の第二回夏期学校に講師として招かれた。この講演では先の東京専門学校の講演に引き続き大西のギリシャ思想

研究の意義を明らかにしている。

「希臘道徳が基督教道徳に移りし次第」

此の希臘の道徳が基督教の道徳に移り行く次第は、之を考究べるに夫自身の価値があるばかりではなく、是で幾分か我日本現在の道徳思想の有様を照すことは出来まい乎[三九]。

大西は、明治維新という大転換を経て日本の道徳思想がゆらいでいることに注意を払い、ギリシャの道徳からキリスト教の道徳思想への変遷を研究することが、当時の日本の道徳思想の在り方を指し示す手掛かりになるのではないかと考えていた。そこには、日本と西洋の異質な思想をより高い次元へと導くための建設的要務を果たそうとする、批評主義を貫いた大西らしい姿勢が伺える。

納富信留によると、大西はギリシャの思想家の中で特にプラトンを尊敬し、プラトン対話篇の言語から翻訳しようと試みていた。しかし、そのためには日本語の哲学文体そのものを作り出す必要があり、彼は格闘したが、留学中に精神失調を来たしてその目的は達成されなかった[四〇]。

惜しくも大西によるギリシャ思想の翻訳書が世に出ることはなかったが、西洋思想と東洋思想との統合や再定義を図ろうという試みが行われ始める明治中期の思想的潮流を考えると、大西による西洋思想の淵源に迫るギリシャ思想研究は当時の日本人にとって重要な知的源泉としての役割を果たしたであろうと考えられる。

### (2) 国粋主義の立場からの受容―『日本人』

研究者から発信され始めたギリシャ思想の研究成果は、大学内に留まらず民間雑誌でも多く取り上げられ初めていた。それらは、明治中期の商業誌時代を代表する、『女學雑誌』『教育時論』『教育報知』『日本人』『國民之友』など様々な立場の雑誌で取り上げられるようになった。その中で、本節ではその一例として、明治二一(一八八八)年創刊の国粋主義の立場をとる『日本人』を取り上げ、言論界ではギリシャ思想に対してどのような関心が向けられていたかを考察する。

『日本人』が主張する国粋主義とは、単純に西洋思想の排斥を行うものではなく、文明開化に必要な要素を古典、近代を問わず学びとり、日本の文明開化に繋げようとするものであった。その意図は、『日本人』第二号巻頭の論稿に示されている。

予輩は徹頭徹尾日本固有の舊分子と保存し舊元素を維持せんと欲する者に非ず、只泰西の開化を輸入し来るも、日本国粋なる胃官

を以て之を咀嚼し之を消化し、日本なる身体に同化させめんとする者也、（省略）國粋なる胃官と以て他邦より輸入したりたる開化を消化し同化したる實例は太だ尠しとせず、彼の歐州文物典章の淵源たる希臘（グリース）の開化は如何、「ヘリーン」民族（希臘の人種）がフェニシアより輸入したる文明開化と自己が固有の國粋を以て消化同化したるものにして、所謂一種特殊なる「希臘（ギリシャ）の開化」と刱起したるものなり[四一]

古代ギリシャがフェニシアの文明を自己の文明と結びつけて同化したことで「ギリシャの開化」が始まるように、西洋文明を輸入し始めた日本は、その西洋の文明と日本の文明とを結びつけ同化してゆく中で「日本の開化」を成し遂げようという意図が示されている。

この雑誌の趣旨の通り、国粋主義の立場から論評を行う『日本人』では、時事問題に関する論評においてもギリシャの政治思想から学びとりながら議論を展開している。

二千二百餘年の昔「アリストートル」は政体を分類して君主政治、貴族政治（アリストクラシー）共和政治の三種となしたりしが、近世に至りては第二種の政体即ち貴族政治は最早や開明社會より其跡を絶つの氣運に至りたり（省略）然るに議員資格の區域を狹隘に制限し、一國の極小部の人士のみに参政の大權を附興するの有様にては、余輩は「アリストクラシー」の臭氣を衆議院に注入したるものと見做し、甚だ遺憾に思はざるを得ず[四二]

この論説は、アリストテレスによる『政治学』の中で分類されている政治体制を参照しながら自由民権運動に関する議論を展開しているものである。以上の引用から、進展するギリシャ思想研究によって得られた見識を自らの歴史の中で解釈し、日本の今後の発展に結びつけようとする、知識人たちの姿勢が示されている。明治時代の西洋化に対する反動化の時代を象徴する国粋主義の知識人たちにも、むしろ西洋古典は積極的に取り込まれようとしていた。

明治中期に入って、日本に流入してきた西洋思想を歴史的変遷とともに体系的に理解してゆく必要があると感じられ始めていた。それは西洋思想研究の最先端に位置する研究者だけではなく、社会でも同様の要請があった。以下、『日本人』第三十四号の匿名の論稿からも確認することができる。

近世哲學を説くに、先づ中世紀より近世紀に移易する際に於ける

思想の傾向を一言し、又古代哲学を近世哲學説明の参考として掲ぐること抔は、評者と同じく筆者に切望して止まざる所なり。[四三]

明治初期において軽視されてきた西洋古典は、東洋思想と西洋思想の再定義の時代に見直され始めていた。その淵源に迫りギリシャ思想研究に着手していた大西のみならず、その研究成果に対する期待は社会においても高まっていた。明治中期に入って西洋古典の受容はより積極的に行われ始めたということができる。

### (3) ギリシャ思想とロマン主義—『女學雑誌』

第二節では、ギリシャ思想研究が始まるのと同時期に言論界でも西洋古典への関心が高まっていた一例として『日本人』を取り扱った。本節では、『日本人』と同様、明治中期の商業雑誌を飾った『女學雑誌』について雑誌の編纂とともに考察していきたい。

『女學雑誌』は、『日本人』の創刊者三宅雪嶺によって『教育報知』『教育時論』とともに「教育界の三雑誌」[四四]の一つに数えられている。同誌ではギリシャ思想を扱った論稿の数が明治中期の商業雑誌の中で最も多かったにも関わらず、雑誌の改編を行った明治二六(一八九二)を契機に突然減少する。このギリシャ思想に関する論稿の消失の理由を『女學雑誌』が対象読者としていた人々のニーズから検討し、第二節とは異なる角度でギリシャ思想に対する社会の関心を考察する。

その雑誌の主旨は「欧米の女権と吾國の女徳とを合わせて完全の模範を作り為さんとする[四五]」と示されている通り、日本の女性解放運動を推進するための啓蒙雑誌であった。しかしながら、対象とされた読者は女性だけではない。啓蒙的な社説の論稿の中で「世間普通學校の卒業生諸君よ[四六]」や、「少年よ[四七]」といった呼びかけが用いられていることからも、男女を問わず「女性の地位の向上を願うあらゆる人々」がその対象であることがわかる[四八]。日本の婦人論はすでに明治初期の啓蒙知識人の間で議論され、日本の近代化の中で重要な社会論争の一つであり、『女學雑誌』の発刊はその流れを汲むものであると捉えることができる。

『女學雑誌』の中でギリシャ思想に関する論稿が扱われているのは、巌本が編集人となった明治十九(一八八六)年から明治二五(一八九二)年までである。それらの論稿は大きく以下のように分類できる。

(一) 格言の抜粋(項目:「言行」、「珊瑚の珠」)
(二) 歴史上の偉大な人物として名前のみ掲載
(三) ギリシャの政治思想、教育思想の考察

（四）女性解放運動の論拠

（一）と（二）においては、扱われている本文こそ短いが、「欧米の女権と吾國の女徳とを合わせて完全の模範を作り為さんとする[四九]」というその使命を果たすべく、東洋または西洋のどちらか一方に偏らず著名な思想家の格言が抜粋されている。

（三）は、ギリシャ思想を引用した政治や教育についての論評である。それは、第二節で紹介したアリストテレスの政治思想の引用のように、時事問題に関する論評のなかで古代や近代、または東洋、西洋を問わず、あらゆる思想を整理しながら議論が展開されており、しばしばギリシャ思想について言及されていた。

最後の（四）は、女性解放運動の先駆けともなった『女學雑誌』特有の記事である。明六社の元社員であり初代東京大学綜理を務めた加藤弘之や日本初の心理学者である元良勇次郎ら錚々たる人物が寄稿している。

加藤は第四九号に「品行論」と題した論文を寄稿している。そこでは、社会の開化にとっては女性が権利を得ることが重要であると述べて、「半開の國では、妻だの妾だのを多く有つことを許して居るから、女の權利が立ッて居りませぬ[五〇]」と、女性の権利の低さを、文明の発展度に結びつけた上で、「ギリシャ、ローマでは（省略）、女は男の爲めに壓制されましたけれども、アジアの女ほどの壓制は受けなかった[五一]」とギリシャを例に挙げ、女性の社会的地位の低さが不偏的なものでないという根拠に用いられている。加藤はギリシャの歴史から女性の低い社会的地位の不偏性を否定するのに対して、元良勇次郎は同様の主張を、ギリシャの神話と日本の神話を用いて論じている。

古代の神秘學は其根原明かならずと雖も一説によれば此れ古代の人情智識等を移したるものにて當時の人民の爲めには小説、科學、政治學、哲學等を含有したるものなり、故に此頃所謂社會學なるものよりは其形状科學的に適ふ所少なきにも拘らず其の實は當時の人情を現はすに最も適したるものなり[五二]。（省略）神秘學に於ては顕はしたる男女の関係如何を考ふるに必ずしも男尊女卑ならず、伊弉諾尊、伊奘冉尊、の天下り給まふたること、天照大神が天地に光を發すること又希臘の神秘學に於てアセナ（アセナは希臘に於て軍事、智識、工業等の女神にしてヅースなる天神の女なり）なる神がヅースの頭より生れたること等の話に至ては何を以て之を女卑と名くるを得るや[五三]。

加藤、元良らの論文から、女性解放運動が高まるなかで女性の社会的地位の低さが不偏的なものであるという見方に対する反論

として、しばしば西洋古典が論拠として用いられていたことがわかる。『女學雑誌』では、以上の四種類の形式で、ギリシャ思想が紹介され連載していた。

明治二六（一八九三）年、『女學雑誌』の誌面から突如として「ギリシャ」の文字が減少する。それは、なぜ起こったのか、『女學雑誌』が抱えていた読者層との関係から考察していく。

明治二五（一八九二）年は、『女學雑誌』の改編の年であった。野辺地清江の『女性解放思想の源流―岩本善治と『女学雑誌』』によると、『女學雑誌』は発刊以来大きく二つの社会層を読者に抱えており、両層のニーズのギャップを抱えながら、均衡をとりつつ度々雑誌の分離と統合を繰り返しながら出版を継続させてきた[五四]。その社会層とは、一つは、「女性の向上に理解と熱意をもつ進歩的な男性と、これに追随しうる少数の進歩した女性との一群」としての上層部と、またもう一つに、「『女學雑誌』の指導によって自身を啓発し、自己の向上を図ろうと望む後進的な女性の一群」としての下層部である[五五]。『女学雑誌』にとってはその使命達成のために、この両層どちらも切り捨てられない層であり、論説的記事を二―ズとして持つ上層部と、後進的な女性が占める下層部の両層の期待に答えなければならなかった。

しかし、巌本は各地を巡遊し多くの読者と接するなかで、その二つの読者層の埋めがたいギャップとそこから生ずる読者の要求の相違を自覚的に把握した[五六]。それらの異なる要求に対処するため、巌本は明治二十五（一八九二）年第三二〇号から、論評を中心とした白表（甲）と文学を中心とした赤表（乙）に分離するという方法をとったのであった。発行当初から『女学雑誌』抱えていたその二つの社会層は、ここで上層部が白表へ、下層部が赤表へと明確に区別されることとなった。

この改編以後、ギリシャ思想に関しての論稿が残されていたのは、上層部のニーズに対応した白表(甲)である。一方の赤表(乙)には、唯一の第三三五号を除いて全くギリシャに関する論稿は見られなくなった。赤表（乙）は下層部へのニーズに応える形で白表から離脱し、明治二六（一八九三）年には文芸中心の『文學界』と名称を変えた。

この赤表（乙）の後継としての『文學界』は、明治日本の文芸運動の拠点となる。つまり、当初の『女學雑誌』が抱えていた下層部の読者層は、明治二〇年代から三〇年代にかけて西洋から受容されたロマン主義[五七]の方へと傾倒していったのであった。

日本のロマン主義の開化は明治二六（一八九三）年の『女學雑誌赤表（乙）』の後継である『文學界』から、後に『明星』に継承されて明治期の「浪漫主義」として確立していった[五八]。それは与

謝野晶子、高村光太郎、石川啄木らが注目を集め[五九]、後に夏目漱石が「浪漫主義」と名付けたものである。

重要となるのは、しばしば理性的すぎると言われるギリシャ思想[六〇]に対して、人間の感性的な部分に重点を置くロマン主義はその性質上相容れないという点である。そもそもロマン主義はヨーロッパで、理性の時代と呼ばれる一七世紀後半から一八世紀にかけての人間理性の潮流に対する反動として、内面の感情を解放するロマン主義が一八世紀末、ドイツやイギリスを中心に始まり全ヨーロッパへと拡大し展開していったものである。

それに対して、日本ではわずか二〇年の啓蒙主義のあとすぐにロマン主義を受容したことになる。ロマン主義を受容する明治二〇年代は、日本哲学界においても実証主義的経験論の単一的な受容からギリシャ哲学研究やドイツ型観念論等、分化と深化が広まる時期と同時期であった。

古典主義や合理主義の反動として個人の内面性を重視するロマン主義と、理性に重きを置くギリシャ哲学とはその性質上相容れない。ギリシャ思想研究のはじまりと同時期にロマン主義が輸入されたことが、日本の下層部にギリシャ思想が広く受け入れられなかった一つの要因であるといえる。

明治二五（一八九二）年まで、最も多くギリシャ思想に関する論稿が見られた『女学雑誌』において、読者のニーズに対応するために分裂した後に下層部向けの赤表（乙）に、ギリシャ思想に関する論稿が全く扱われていないということから、ロマン主義を好む読者からは好まれなかったということが明らかである。

## 三、大衆社会への普及の試みと失敗

第三章では、さらに大衆のリテラシーが向上した明治後期に、初の『プラトーン全集』日本語訳が出版され、研究者から大衆へギリシャ思想がどのように伝えられたのかを考察してゆく。

明治後期には近代教育制度が日本社会に根付き、明治二七（一八九五）年に全国で七七・一五％であった就学率は、明治三五（一九〇二）年には九五・八％に達していた[六一]。大衆のリテラシーの向上とともに新聞読者の大衆化が進行し、それまで一部の知識人のみを対象読者としていた「大新聞」は衰退を招いていた。

新聞読者の大衆化によって、小新聞は「下層の人民」の様々な社会的不平や不満を煽りたて、政治の世界に社会的不満がナマのまま噴出するものと変容していた[六二]。明治初期には所得が低い車夫が新聞を購読することはなかったが、明治後期に至るとその車夫でさえ約一軒に一紙の割合で新聞をとっていたことが『平民新聞』明治三七（一九〇四）年三月六日の記事から推定される[六三]。

下層階層のなかには、産業革命とともに形成された職工、職人階層が大きな比重を占め[六四]、それが本章で取り上げる労働者を対象読者とした『二六新報』『萬朝報』の隆盛の背景であった。

このように社会全体のリテラシーが向上し、研究者による西洋思想研究成果は知識人の間のみではなく、社会一般に広く発信することが可能になった。以上のようにしてマスコミュニケーションが生まれた明治後期、初めて古代ギリシャの代表的哲学者の一人であるプラトンの著作が日本語訳で出版された。本章ではプラトンの著者を翻訳した研究者とそれに対する反響について当時の大衆紙から読み解いていきたい。

### (1) 初の『プラトーン全集』日本語訳出版

明治三六(一九〇三)年に第一巻『プラトーン全集』が刊行された。第一巻は、大西と留学先で共に過ごした松本亦太郎と木村鷹太郎の共訳で、第二巻以後は全て木村一人の手によって完成された。

木村鷹太郎は明治三(一八七〇)年に愛媛県の宇和島城下に生れ、年齢は大西の六歳年下にあたる。大阪で中学校を卒業した木村は明治二一(一八八八)年に東京の基督主義の学校である明治学院に入学した。その卒業にあたって行われた英語演説会では第一等賞となっている[六五]ことから、英語に長けた学生であったようである。明治二四(一八九一)年には、帝国大学文科大学の哲学科の生徒となり「善の研究」で知られる西田幾多郎らと共に学んでいる。川崎宏によると、東京帝国大学在籍中の木村は日本人で初めて哲学科の教授となった井上哲次郎の説に傾倒していた[六六]。熱心に執筆活動を行い、『哲学雑誌』への寄稿や、帝国百科全書の中の『東洋西洋倫理学史』を担当していた。

明治三〇(一八九七)年には自身で月刊『日本主義』を発刊、明治三一(一八九八)年に『京華日報』を刊行する新聞社に入社、明治三二(一八九九)年に『富士新聞』の発行など、あらゆる雑誌新聞を転々としながら論文を執筆していたが、それらの新聞や雑誌が廃刊になった後は翻訳を中心とする活動へと転向した。

明治三六(一九〇三)年から刊行した『プラトーン全集』は、一八九二年にオクスフォード大学出版局から刊行され、最も定評があった英訳からの重訳を日本語に翻訳したものである。そのなかで『ポリティア』と翻訳した『理想国』の文体以下の通りである。

余曰く、君の言う所大なる誤りに非ず。

彼れ曰く、然りと雖吾等の仲間は幾人あるかを君は知せるか。

勿論知せり。
君は是等凡ての人々よりも強力なりと思へるか。
若し夫れ然らざらんには、君は現に、今ま在る所に在らざる可からず。[六七]

木村が翻訳した文体は、『論語』で孔子が弟子たちに語る説諭に類似したものであった。後世の我々から見れば、この文体は異様に感じられるかもしれない。しかし『理想国』第一巻初版の巻末に予告された「大要」に「日本の武士道に酷似す」と記されてある[六八]ことからも、日本とギリシャの類似性を意識していた木村自身にとってはこの文体が自然な日本語訳であったのかもしれない。原典に忠実であるかという点を考慮するとその文体は誤解を生むものではあるが、しかしながら儒教思想を基盤とした日本社会において、ギリシャ思想を浸透させる最も有効な手段であったとも考えられる。結果的に、日本初のギリシャ思想の飜訳書は日本人にとって親和性の高いものとして紹介されたのであった。

木村の古代ギリシャと日本の原始性の類似性に関する研究は、のちに明治四四（一九一一）年出版の『世界的研究に基ける日本太古史』に引き継がれる。そこでは、ギリシア語を研究した結果、日本の歴史上の人名や地理地名を中央アジア、ギリシア、ローマ、エジプト等のそれぞれに跡付けて奇抜な対比を試み[六九]世の慢罵冷嘲を受けた。日本民族の原始性について諸々の新説について、研究者の間では、「木村君は発狂せるが如し。新研究果して儲かるか。儲からざるべし。[七〇]」との批判を受け、学術的な評価は得られなかった。

しかし、明治三六（一九〇三）年の『プラトーン全集』に関しては、戦後京都大学のプラトン哲学研究の権威である田中美知太郎も少年時代に木村訳を読み興味を深めていったというエピソードを残している[七一]ほど、後世にまで影響を与えたものであると考えられる。ギリシャ語の原典からの飜訳ではないという理由から、戦後のギリシャ思想研究者たちからは無価値であるとみなされるようになったが、戦前には木村訳が決定版であった[七二]。

ギリシャ語の原典からの飜訳活動に挫折した大西の死から三年後、木村の手によって英語からの重訳という形式をもって、多くの人にとってギリシャ思想を読むことが可能になった。

### （2）大衆紙による普及―『二六新報』

木村の『プラトーン全集』の翻訳により、日本において初めて西洋古典が学者から社会へと直接的に発信された。そのとき、日本はすでに大衆ジャーナリズムの時代を迎え、『プラトーン全集』

は大々的に取り上げられていた。その普及活動に熱心であったのは、『二六新報』である。

『二六新報』は、明治三六（一九〇三）年頃、東京で最も発行部数の多かった大衆新聞である。その盛況ぶりは、雑誌『新声』で、「現時の新聞社会に在りて、最も華々しきは『二六』也。」と評価されている[七三]。新聞の売れ行きだけではなく、『二六新報』が主催した明治三四（一九〇一）年四月三日の労働者大懇親会も大盛況で、その読者層の中核は職工、職人階層であったことを裏付けている[七四]。

同紙がギリシャ思想を含めた最新の西洋思想研究の成果を普及することになぜ熱心であったのかを考察するために、その編集者である秋山定輔の学問上、思想上のバックグラウンドについて明らかにしておきたい。

秋山は、慶應四（一八六八）年に現在の岡山県倉敷に商家に生まれた。明治十一（一八七八）年に岡山の学校で学び、上京した後、明治二十（一八八七）年で帝国大学法科大学に入学した[七五]。秋山が入学したこの年は、は東京大学が東京帝国大学へと改称し、英米的な教風からドイツ学派重視の傾向へと転向した翌年であった。秋山は、大西より四歳年下にあたるが、東京帝国大学への入学はほぼ同時期である。儒教的理想主義の復活、西洋理想主義哲学の受容が始まる明治中期に、秋山と大西の二人は新学風に変わった東京帝国大学の一期生、二期生となった。

帝国大学卒業後は一度官僚としての道に進んだが、わずか一年間で辞職、新聞を創刊して経営を始めた。『二六新報』の創刊は、明治二十六（一八九三）年であるが、当初は軌道に乗らず、エリートを読者層とした高級紙から平民や労働者を読者として想定した大衆紙へと切り替え再刊することで成功の道が切り開かれた。『二六新報』は廉価と三面記事に力を注ぎ、三井攻撃、娼妓自由廃業をはじめとするセンセーショナルなキャンペーンを行って読者を広げていった。やがて急速に発行部数を伸ばし、十五万部に達するなど、東京において一躍トップクラスの新聞となった[七六]。明治三五（一九〇二）年には秋山は『二六新報』による人気から、第七回総選挙で当選し衆議員議員となって[七七]政界にも進出していった。

秋山が『二六新報』を通してギリシャ思想の普及に貢献したのは、日露戦争に入る前年の明治三十六（一九〇三）年で、大衆からの人気を博している最盛期である。以下は、第一八一五号の第一面の冒頭に掲載された論評である。

「哲學書類の飜譯」

同業者の報ずる所に依れば、富山房は這回井上博士を中心とせる、赤門出身の学士博士に囑して、遠く歐亞思潮の淵源に遡り其典拠となれる哲學書類を翻譯し、逐次之を刊行す可しといふ。之吾學界の爲に久敷望んで未だ得るに至らざりし吉報なり七八。

記事は、井上哲次郎博士が今後哲学書類を翻訳していくという知らせを聞いて、その喜びを第一面の社説で述べている。この記事からは、西洋思想研究の最高峰である東京帝国大学と新聞報道との距離が近く、『二六新報』の西洋思想普及に対する積極的な姿勢が受け止められる。

『二六新報』は、井上哲次郎による翻訳書だけではなく、木村の『プラトーン全集』の出版にもその出版以前から注目していた。

「近時の出版界」

片片たる小書肆が着手し得ざる大著譯物に向かって釣を下しなば、得る所鮮小ならざるのみならず、依りて以て帝國の文化を輔翼し一般士人の読書趣味を誘致するの功、測るべからざるものあらん、富山房は近時衰颯の評あるも「地名字書」を完成し、且将に着手せんとする「プラトー全集」の如き（その精否は未定なれども）を出し、尚此かる方面に於て一二不朽のものを留めなば、出版書肆として、尚文藝の上に記憶せらるるに足れり七九。

同記事も先に引用した「哲學書類の飜譯」と同様、第一面冒頭の誌面を飾る論稿であることから、『二六新報』において、西洋思想の翻訳書の出版は重要なニュースとして大衆に向けて発信されていた。

『プラトーン全集』発刊から約一ヶ月後の一一月二二日号では、同じく第一面の新著精鑑の項目で木村鷹太郎を称賛している。

多量の健全なる思想を含蓄せるプラトーン全集の右の如く適當なる翻譯者を得て、邦字にて読まるゝに至りしをは、眞に我國民の爲めに發すべきとなれば、吾徒は譯者の勢を多とし、又之を出版せし書肆の大□（潰れ字）と公共心とを博せずして止む能はず八〇

以上に挙げた記事以外にも、『プラトーン全集』が発刊された明治三六（一九〇三）年の『二六新報』の誌面には、度々ギリシャ思想の普及に寄与する記述がみられる。当時発行部数一五万部という異例の数は、秋山の西洋古典受容への期待も、明治後期に台頭する大衆の心を一時的に掴んでいたと考えられる。

## （3）『二六新報』の失墜と『萬朝報』の逆転

哲学の必要性を説き、啓蒙活動に励んだ秋山であったが、その後、不運にも二六新報は約十万もの読者を失ってしまった。その契機となったのは露探事件である。

露探事件は、明治三七（一九〇四）年三月一六日の桂内閣に批判的であった『二六新報』が、前年六月一七日の日露協約成立という誤報、および秋山がロシアのスパイ（露探）であるという噂と組み合わされて、国民の厭戦気分を煽っていると議会で追及された事件である。秋山が露探である証拠は発見されなかったが、秋山は議員を辞職せざるを得なくなった八一。秋山は衆議院議員としても桂内閣を批判していたため、政府にとって警戒すべき存在であった。

『萬朝報』は、露探事件について秋山および同紙に対してここぞとばかりに批判し猛攻撃を加えた。その効果は大きく、日露開戦前に一日十四万部以上を売り上げていた『二六新報』は見事に評判を落とし、発行部数を三万部台にまで落としてしまった。

凋落した『二六新報』に代わって『萬朝報』は、社会の労働者層の人気を得ることに成功した。『萬朝報』は、「不偏不党」を貫き、明治二五（一八九二）年一一月一日に創刊された安価な大衆紙で、翻訳小説の筆者として活躍していた黒岩涙香によって発行されていた大衆紙である。

『二六新報』と『萬朝報』の両紙とも「不偏不党」を謳い、読者層が大きく重なり、社会批判性の強い三面記事やリベラルな論調を売りとするライバル紙であった。反権力的姿勢を貫き通した大衆紙の両紙は三面記事などの類似性だけでなく、当時国民にとって最大関心事である日露戦争論の論調も近い。桂内閣に批判的だった『二六新報』と、非戦論で奮闘していた『萬朝報』は、両紙ともに明治三六（一九〇三）年十月頃に開戦論に転向しているため、この点に関する両紙の大きな相違はない八二。

しかし、これら二つの大衆紙には、学問に関する主張において決定的に異なっていた。『プラトーン全集』発行の九カ月前の『萬朝報』では第一面最上部に位置する「言論」で、以下のような主張がなされている。

「速やかに漢文を廃止すべし」

吾人と雖も、シナの經營が将来日本國民の任である事は善く知って居る。然しながら、それは國民の一部が専門の事として當れば善い。（省略）それが爲に全國民の教育に無用なる漢文を強ひらるゝは迷惑至極の事と云はねばならぬ。

普通教育として漢文の存在が、何ほど知識の普及を妨げ、他の學科の進歩を害するかは、今更らくだくだしく説くにも及ばまい。

吾人は只、帝國主義者の虚栄と野心との爲に、國民の智徳の進歩に大妨害を興へられるに忍びぬ者である八三。

普通教育における漢学は実学に必要な知識を得る学問を妨げ、他の学科の進歩をも害する、と『萬朝報』の徹底的な実学傾倒の態度が示されている。

『プラトーン全集』発行と同月、『二六新報』では、盛大に取り上げ、哲学を用いて国民の啓蒙を試みていたのと対照的に、『萬朝報』では全く正反対の議論で、古典を読むべきでないと大衆に訴えている。

黒岩涙香「讀書の説」

余は思ふ新なる書を讀む可し。近時諸新聞諸雑誌に多く讀書の勧めの見ゆるを観るに、新刊の書を貶して古書を称揚する者も多し。誠に知識日新の勢に遠かる者と云う可し八四。

『二六新報』から『萬朝報』への十万部もの読者の流出は、日露戦争という緊張した社会状況の中で、不運にも秋山自身が失脚したことを原因とするものであった。露探事件による『二六新報』に対する大衆のイメージの悪化は甚だしく、その効果は、明治三十六（一九〇三）年から三十七（一九〇四）年にかけての東京新聞界の構図を見事に一転させるほどであった。

ここで『二六新報』の編集者秋山と同様に、『萬朝報』編集者の黒岩涙香の学問上、思想上のバックグラウンドについて述べておきたい。黒岩は、文久二（一八六二）年に土佐藩に生まれ、年齢は秋山より六歳年上にあたる。故郷で漢学を学んだのち明治十一（一八七八）年に大阪英語学校の寄宿舎に入り、明治一二（一八七九）年には上京し東京駿河台成立学舎、続いて慶應義塾で学んだが、教科書による勉強がいやでわずか六カ月で退学した八五。黒岩はその後、『東京興論新誌』の編輯局員となり政談演説会に登壇したりしていた。後に、大阪専門学校で身に付けた英語力を生かし、海外推理小説の翻訳家として名を挙げ、その作品を『都新聞』で次々と連載していたが、明治二五（一八九二）年に独立し、『萬朝報』を立ち上げた八六。

| | 1903年 | 1904年 | 1914年 |
|---|---|---|---|
| 二六新報 | 142,340 | 32,000 | 50,000 |
| 万朝報 | 87,000 | 160,000 | 100,000 |

図一　明治末期新聞推定発行部数
（出典：有山、竹山『メディア史を学ぶ人のために』、一〇五頁）

重要となるのは、ほぼ同時代を生きた秋山と黒岩であるが、両者の学問上のバックグラウンドは、明治中期に流入した理想主義

的な新学風の影響を受けているかという点について異なっている点である。両者ともに、明治後期のジャーナリズムにおいて欠くことのできない知識人であるが、秋山は東京帝国大学改編後の二期生にあたり、秋山が帝国大学へ入学する頃に黒岩はすでにジャーナリスト、また翻訳家として活動していた。明治三六年頃、露探事件をきっかけに『二六新報』と『萬朝報』とは、反権力的姿勢を貫いて両紙ともに労働者を味方につけていたが、秋山と黒岩には決定的に異なる学問観が形成されており、それぞれの主張を展開していた。

明治一九（一八八六）年以降の理想主義哲学へと舵をきった帝国大学の新学風の中で学んだ秋山は、秋山の息子、秋山一が理事長を務める桜田倶楽部によって編纂された『秋山定輔伝』で、「なにものもおそれず真理実践にとびこんでいく激しい理想主義がその命であった」という人物像が描写されている[八七]ような理想主義者であった。一方、黒岩は地元で漢学を学んだが、一六歳のときに官立外国語学校である大阪英語学校で英語を身に付ける。東京帝国大学が新学風に変わる明治一九（一八八六）年にすでに実用的な英語を身に付け生計を立てていた黒岩にとっては、西洋思想を体系的に理解するために西洋古典に立ち返ることは無意味であった。

渡辺雅弘の『日本西洋古典文献史』で掲載されている論稿から判断すると、大衆紙の形勢が逆転した直後、明治三七（一九〇四）年に日本は日露戦争に入り大衆向けの新聞や雑誌においてギリシャ思想に関する論稿はほとんど姿を消し、一方で研究機関におけるギリシャ思想研究は日露戦争に関係なく進展していた。明治後期のギリシャ思想研究は主に、大西が設立に携わった丁酉倫理會発行の『丁酉倫理會倫理講演集』やキリスト教青年会の機関誌である『六合雑誌』に最も多くみられた。

この『二六新報』と『萬朝報』の抗争は、明治時代において、ギリシャ思想研究を大衆から引き離す一つの要因となったのではないだろうか。明治三六（一九〇三）年『プラトーン全集』出版と明治三七（一九〇四）年の日露戦争開戦が同時期でなければ、日本語訳に翻訳されたばかりのギリシャ思想も広く明治時代の国民に読まれていたかもしれない。

## 終章

明治中期以降の言論界は日本の西洋思想移植の実証主義経験論から理想哲学主義というプロセスによって、東京帝国大学とそれ以外によって二層に分断されていた。宗教蔑視、古典蔑視の傾向

の強い実証主義論者の明治初期の思想家たちによって設立された教育機関と、明治中期に西洋思想が体系的に移植され始める東京帝国大学の教育とは、古典軽視と古典尊重、現実主義と理想主義という相容れない思想が日本で形成され、二種類の知識人を生む原因となっていた。その二種類の思想上の分岐点は、一つには帝国大学への進学の有無、またもう一つはキリスト教の影響を受けているか否かによって、古典軽視と古典尊重とまた、形而上学への態度とを決定的なものとなった。それはまた、現実主義と理想主義との反復でもあった。

大衆の時代が到来した明治後期、言論界に影響力を持った人物たちは、この分断した明治中期の落とし子であった。大学で勧められる新しい学風を社会の下層部に伝える媒体となる大衆新聞の編集者たちが、分断した思想傾向のどちらに属していたかが、その後の大衆の思想傾向にも影響を与えていただろう。新学風に触れた帝国大学出身の秋山の失脚によって、旧学風の実学傾倒の黒岩の隆盛は、即ち古典尊重から古典軽視の流れへと明治後期の大衆の関心を大きく転換させる要因になった。

少なくとも、ギリシャ思想研究の黎明期である明治中期の時点では、様々な雑誌で取り上げられ、東西の古典を取捨選択しながら日本の歴史と結びつけていく試みがなされており、日本においてギリシャ思想が自らの精神史の一部に取り入れる準備がなかったわけではない。識字率が九八％を越え大衆の時代となったとき、ギリシャ思想受容の最盛期に達するはずの明治三七（一九〇四）年、日本は同時に日露戦争という局面を迎えてしまった。

---

一　富永健一『思想としての社会学　産業主義から社会システム理論まで』新曜社、二〇〇八年、Ⅳ頁。

二　内山勝利「古代ギリシア・ローマ」『学術月報』五三号、二〇〇〇年、一二三六―一二三九頁

三　大久保利謙『明六社』講談社学術文庫、二〇〇七年、二三六頁

四　富永健一『思想としての社会学　産業主義から社会システム理論まで』新曜社、二〇〇八年、四頁。

五　同右、九頁。

六　同右、七頁。

七　同右、七三頁。

八　同右、七九頁。

九　松本三之介『明治精神の構造』岩波書店、二〇一二年、三七頁。

一〇　前掲、富永『思想としての社会学　産業主義から社会システム理論まで』、九三頁。

一一　前掲、松本『明治精神の構造』、三八頁。

一二　桑木厳翼『日本哲学の黎明期』、書肆心水、二〇〇八年、二〇頁。

一三　山室信一、中野目徹校駐『明六雑誌（上）』岩波文庫、一九九九年、

一一七頁。

一四　松浦玲「文明の衝突と儒者の立場―日本における儒教型理想主義の終焉（三）―」『幕末維新の文化』、十八頁。

一五　田村正紀『消費者の歴史』千倉書房、二〇一一年、六一頁。

一六　平山洋『大西祝とその時代』日本図書センター、一九八九年、一五頁

一七　柿沼肇『近代日本の教育史』教育史料出版会、一九九〇年、四四頁。

一八　同右、四四頁。

一九　同右、七八頁。

二〇　同右、八一頁

二一　同右、八四頁。

二二　大久保利謙『明六社』講談社、二〇〇七年、四八頁。

二三　西田長寿『日本ジャーナリズム史研究』みすず書房、一九八九年、一八一頁。

二四　箕作麟祥「人民の自由と土地の気候と互に相関するの論」『明六雑誌』第四号、岩波書店、一四五頁。

二五　箕作麟祥「リボルチーの説（二）」『明六雑誌』第十四号、岩波書店、三六頁。

二六　山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、一九八一年、六〇頁。

二七　同右、山本『近代日本の新聞読者層』六九頁。

二八　八鍬友広「明治期日本における識字と学校」『識字と読書　リテラシーの比較社会史』昭和堂、二〇一〇年、七九頁。

二九　濱田恂子『近・現代日本哲学思想史』二〇〇六年、関東学院大学出版会、二五頁。

三〇　渡辺和靖「明治中期の思想的課題（一）―井上哲次郎と大西祝―」『日本文化研究所研究報告』第十集、一九七四年、百一頁。

三一　渡辺和靖「明治中期の思想的課題（二）―井上哲次郎と大西祝―」『日本文化研究所研究報告』第十一集、一九七五年、七四頁。

三二　前掲、西田『日本ジャーナリズム史研究』一八八頁。

三三　前掲、平山『大西祝とその時代』日本図書センター、一九八九年、八六頁。

三四　同右、五二頁。

三五　桑木厳翼『日本哲学の黎明期：西周の『百一新論』と明治の哲学界』書肆心水、二〇〇八年、一五六頁。

三六　前掲、納富『プラトン　理想国の現在』、七二頁。

三七　大西祝『大西祝全集』第三巻、日本図書センター、一九八二年、七頁。

三八　大西祝「古代希臘（ギリシャ）の道徳と基督教の道徳」『大西祝全集』第五巻、三七〇頁。

三九　大西祝「希臘道徳が基督教道徳に移りし次第」『全集』第五巻、三八五頁。

四〇　納富信留『プラトン　理想国の現在』慶應義塾大学出版会、二〇一二年、七一頁。

四一　志賀重昂「「日本人」が懐抱する處の旨義を告白す」『日本人』第二号、五頁。

四二　菊池熊太郎「近世ノ「アリストクラシー」」『日本人』二十四号

、六頁。

四三　鐵挙居士「哲学涓滴を讀むを讀む」『日本人』第三十四号、四十二頁。

四四　久木幸男「解説　教育報知と日下部三之介」『教育報知復刻版』ゆまに書房、一九八六年、五頁。

四五　「発行の趣旨」『女学雑誌』創刊号、三頁。

四六　「學者安身論」『女学雑誌』第二百八十六号、十八九一年、二頁。

四七　「改革者となる乎　随從者となる乎」『女学雑誌』第二百五号、一八九〇年、四頁。

四八　野辺地清江『女性解放思想の源流—岩本善治と『女学雑誌』』校倉書房、一九八四年、九頁。

四九　前掲、「発行の趣旨」『女学雑誌』創刊号、三頁。

五〇　加藤弘之「品行論」『女学雑誌』四十九号、六頁。

五一　同右、七頁。

五二　元良勇次郎「非男尊女卑を論じて和田垣法學博士に質す」『女学雑誌』、二百八十七号、三〇七頁。

五三　前掲、元良「非男尊女卑を論じて和田垣法學博士に質す」『女学雑誌』、二百八十七号、三〇八頁。

五四　前掲、野辺地『女性解放思想の源流—岩本善治と『女学雑誌』』十頁。

五五　同右、九頁。

五六　同右、三〇頁。

五七　中野久美子『文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造：明治期ロマン主義受容の射程』松本工房、二〇一〇年、六〇頁。

五八　同右、一二九頁。

五九　同右、六一頁。

六〇　Eric.Robertson. Dodds,岩田靖夫・水野一訳『ギリシャ人と非理性』一九七二年、みすず書房、一頁。

六一　前掲、山本『近代日本の新聞読者層』、頁。

六二　前掲、有山、竹山『メディア史を学ぶ人のために』一〇八頁。

六三　前掲、山本『近代日本の新聞読者層』一九二頁。

六四　同右、一九四頁。

六五　川崎宏「木村鷹太郎攷序」『英学史研究』六号、一九七三年、四七頁。

六六　同右、四八頁。

六七　前掲、納富『プラトン　理想国の現在』頁。

六八　同右、一〇九頁。

六九　川崎宏「木村鷹太郎攷序」『英学史研究』六号、一九七三年、五二頁。

七〇　同右、五二頁。

七一　前掲、納富『プラトン　理想国の現在』一〇五頁。

七二　前掲、納富『プラトン　理想国の現在』一一四頁。

七三　前掲、山本『近代日本の新聞読者層』一五九頁。。

七四　前掲、山本『日本の新聞読者層』一六〇頁。

七五　土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌　創始者・経営者編』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、九一頁。

七六　土屋礼子編著『近代日本メディア人物誌　創始者・経営者編』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、九五頁。

七七　前掲、桜田倶楽部『秋山定輔伝』五〇六頁。

七八　「哲學書類の翻譯」『二六新報』一九〇三年、第一八一五号、一頁。

七九　「近時の出版界」『二六新報』一九〇三年、四月四日、第一五九五号、一頁。

八〇　「新著精鑑」『二六新報』一九〇三年、一一月二二日号、一頁。

八一　同右、九六頁。

八二　前掲、山本『近代日本の新聞読者層』一五二頁。

八三　「速やかに漢文を廃止すべし」『萬朝報』一九〇三年一月一一日号。

八四　黒岩涙香「讀書の説」『萬朝報』一九〇三年十月四日号。

八五　岡直樹『偉人涙香』土佐文化資料調査研究会、一九七〇年、一七頁。

八六　土屋礼子『近代日本メディア人物誌　創始者・経営者編』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、六七頁。

八七　桜田倶楽部編『秋山定輔伝』桜田倶楽部、一九七七年、四四頁。